

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別取扱承認雑誌第六二七号  
平成二十六年十月一日発行(第四百七卷第十号)

# ホトトギス

十月号



## 俳句随想 〔三百八十八〕

汀子

野分会は、主宰の稲畑廣太郎が指導している。一年に一度の野分会の勉強会である、野分会夏行は、私も参加し、野分会を卒業した人達も参加している。先日、熱海で開催された。若い人達の俳句は素晴らしい。発想が自由でありながら俳句の枠を逸脱していない。私も一生懸命斬新な俳句を作ろうと頭を柔らかくして俳句を楽しんだ。そして、俳句とはなんぞや、と自分に問いかけつつ、限界に挑んだのである。成功したかしなかったかは分からないが、俳句を長く作っている内に、皆マンネリズムという壺に落ちていくのに気がつかないことが多い。そのことに気がつくためには、自分との闘いをしなければならぬのではないか。常套的な表現に甘んじて、格好よく一句に纏めるために営々としていては進歩がないのではなからうか。少々表現が拙くとも、発想の新鮮なものを一句でも、挑戦してみたい。虚子は、雑詠で指導するのに、客観写生を説いた。平明に叙す大切さも説いた。しかし、それが内容のつまらなさに落ちて行きそうになったとき、客観写生と言うといえども主観の範疇にある。と言ったことで、雑詠の投句のやや主観が出て来たことがあった。指導者は主義主張が変わるのではない。作品が常に斬新であって欲しいと思っっているからであることを私も踏襲して行きたいと思っっている。

旬日記 汀子

平成二十五年十月五日 菅屋ホトトギス会

励まねばならぬと思ふ秋灯下  
薄々とうすらすと秋告ぐる雲  
十月六日 下萌旬会

稲雀こぼれし二二三芝歩く  
松手入よりはじまりし庭仕事  
祝賀会までこの秋の空欲しく  
快晴の空に雲置きそめし秋  
十月七日 ロイヤル吟行会

秋晴の古都も月曜休館日  
大広間やまると名付く秋灯  
雲流れ流れて古都の秋の空  
十月八日 大隈倶楽部

消息を聞き秋惜む心かな  
考への二転三転深林橋むく  
古都訪へば惜秋の情深かりし  
横川路の薄々紅葉薄紅葉  
体調の元に戻りし秋惜む  
色鳥の飛び立ちし枝紛れたる  
十月八日 細葉倶楽部

よく晴れて見れば近くに秋の山  
昨日会ひ今日又会ひぬ秋深し  
祝の日の近づいて来る秋灯  
台風の魁げの雨かも知れぬ  
十月十日 清交社

何事もなきが秋思でありし人  
禁酒守る新酒の頃と思ひつつ  
皮むきて手間も味なり栗御飯  
秋惜む旅とて休む会二三

刻々と過ぎゆく時間とて秋思  
秋惜む会に加はりたる二人  
十月十一日 工業倶楽部

明日今日明日も秋の日あるがまま  
昨日今日 子規の話と旬会(和田先生)  
今年又講話聞く午後秋の暮  
似顔絵を画き爽やかに旅立つと  
この会の済めば展示を見たき秋  
十月十四日 西の虚子忌

みそなはせ給ひし日和西虚子忌  
露寒を忌日この心もて纏ふ  
仰ぎたしこの峰寺の十三夜  
十月十五日 有恒俳句会

初紅葉視界そこより展けゆく  
山路行くヘアピンカーブ初紅葉  
枝揺れて小鳥の所在知られけり  
秋高き一日横川に在りしこと  
脱げばすぐ又着ることも肌寒し  
じつとしてをれば峰寺肌寒し  
すぐ紛れ易き狭庭に來し小鳥  
十月十五日 無名会

今日までは持たぬ陽気や秋時雨  
染しみとせし日々もあり温め酒  
今さう祭酒と知られぬ時雨  
遠き旅 禁酒の心も秋時雨  
台風の予報どうでもよくなりぬ  
温め酒時間楽しみをりにけり  
十月十六日 夏潮旬会

台風の落せし木の葉拾ひけり  
ベル押して来る地車も秋祭  
直接でなき台風もかく荒れて  
西虚子忌済みし一年ふり返る  
十月十七日 クラブ合同

快晴を夜につなぎたし後の月  
昨日逢ひ今日会ふいづれ秋の空  
今日も又暮れし家路に十三夜  
虚子の世を偲ぶよすがよ後の月  
十月十八日 時雨旬会

計画のなかりし今宵十三夜  
旅仕度など要らぬ旅後の月  
東京に集ふはらから十三夜  
風音の絶えることなし十三夜  
草の実の飛んで遥かありにけり  
山雀と思へばさつと飛び去りぬ  
十月十九日 旬会と講演の会

祝賀の日刻々とあり身に入みぬ  
年齢を重ねしことも身に入みぬ  
十月二十一日 アサヒカルチャー  
西空に朝月白し秋惜む  
笠雲に富士の初雪隠されし  
近づいてゐし台風のこと忘れ  
十月二十四日 きさらぎ会

落鮎に川音高き夕べかな  
川音の常の如く鮎落つかな  
秋高し薄々と雲置き乍ら  
台風の方案じてをりし祝ぎ  
台風のそれるを信じ祝を待  
十月二十六日 年尾忌

祝ぎ心までは濡らさぬ台風裡  
台風の名残の雨に集ふ会  
十月二十九日 贈(四虹)

初曆明るき未来あることを  
十月三十日 摩耶山俳句大会  
山の秋惜しめばかくも晴れしこと  
紅葉冷えさへ心地よき山の晴  
露寒くとも摩耶山の快晴に

# 廣太郎句帳

廣太郎

平成二十五年十月一日 むさし野吟行会

長月のプロローグとは濡れ色に  
野球部の練習爽やかに落球  
初鴨に水面緩んでをりにけり

十月三日 蕉心会

四十雀都心の目覚めとは早し  
秋の川未来は未来過去は過去  
長月の机辺散らかることも又  
秋風と思へば街もそれなりに  
一枚のその一片の薄紅葉  
秋の蚊にA B型は嫌はれて  
木の実落つ余韻は水に沈みゆく  
水音に未枯れてゆく一部分  
水澄んで分子解けて来りけり  
金風に乗りにシベリアより来る

十月六日 野分会声屋例会

馬肥ゆるそんなにおなか出てまつか  
林檎剥く刃先を四度傾けて  
君食めば其は禁断の林檎かな  
林檎食む今の彼女は津軽弁  
馬肥ゆる蝦夷の大地を友として

十月六日 虚子記念文学館投句

六甲の牧場鎮もり馬肥ゆる  
十月七日 カトリック新聞選考時  
行く末を確と見据えて秋高し

十月十日 土筆会

運動会だけは目立ってゐる少女

ばつた跳ぶ水惑星を凹ませて  
村中が運動会といふ過疎地  
ばつた跳ぶ流線形の顔歪め

十月十四日 西の虚子志

西虚子忌句碑の復活待たれたる  
日の出前てふ朝寒を発ちて忌へ  
露の虎たつた二日の夢でした

十月十七日 登高会

初鴨や叡山の忌を知りしかに  
マントルに近づいてゆく自然薯  
朝寒や忌心連れて乗る列車  
初鴨に空母のやうな余呉湖かな  
自然薯掘る手練播る手練かな  
朝寒の東京駅といふ活気  
朝寒は苦手と詠みし佳人かな

十月十九日 ホトギス社句会

身に入むや大琵琶に景一つ失せ  
四十雀都心に朝を配りゆく  
塔一つ拝し身に入む横川かな  
四十雀住宅街といふ音色

十月二十日 野分会東京例会

地平線果ての果てまで馬肥ゆる  
馬肥ゆる地球の自転遅くして  
歯が二本欠けて林檎の味を知る

十月二十一日 朝日カルチャー若草句会

鱚雲には青空は狭過ぎる  
うそ寒き闇に消えゆく女かな  
鱚雲飛行機雲に釣られけり  
鱚雲都庁の空を整へて  
うそ寒や今夜も徹夜することに  
うそ寒や君の小さき嘘に酔ひ

十月二十二日 若水句会

みのこづちズボンに付けて午前様  
古都の夜を魑魅に還し鹿の声  
天高し静止衛星てふ速度  
みのこづち新幹線で旅立ちけり  
丸都の景妻恋ふ鹿に暮れゆけり  
古の内朝の鼓動や天高し

十月二十三日 日異学園句会

鳴いて夕日を少し戻しけり  
先づ栗を避けて栗飯食べ始む  
未枯るる山気霊気を纏ひつつ  
親指をずぶと沈めて栗を剥く  
未枯の庭に一輪咲きしもの

十月二十六日 年尾忌

添水の音聞く忌心と祝ぎ心  
年尾忌や酒好きは祖父ゆづりかも  
颯風の逸れて昂る祝ぎ心

十月三十一日 十月二十七日に行われた「ホトギス」  
ス一千四百号記念祝賀会の席上汀子主宰から突如主  
宰交代を発表される。その日より私が「ホトギス」  
主宰となる。その特集の為「俳句界」出句

秘め事をさらりと語る秋灯下  
唐突といふ言の葉のうそ寒し  
主宰てふ二文字重し天高し

あるがままでふ爽やかな覚悟かな  
身に入みて未来への舵取り始む  
冬支度心新たにすることも  
秋惜むこれからのこと思へば尚  
秋深し謙虚な心忘れまじ  
金風や決心揺るがざるものに  
これよりは更に高きに登らんと

# 雑詠

## 廣太郎 選

春炬燵遺墨を掛けてくれもして  
さいたま岡安仁義  
 春愁や励ましくれし師の遺墨  
 師の今も遺墨に生きて春深し  
 鵜の巢に水は碧として脆し  
 香川湯川 雅  
 芭蕉葉の半分は折れ風半分  
 同  
 躓いてゐるは波とも海月とも  
 同  
 日に焼けてマドンナ戻る伊予のバス  
 東京大久保白村  
 露涼し少年虚子の育ちし地  
 同  
 母の日の伊予にて虚子の母のこと  
 同  
 鵜籠より出してまづ眼に語りかく  
 神戸立村霜衣  
 鳥を見て心を鳥にして涼し  
 同  
 襟元に袖に薄暑をひらひらと  
 同  
 汗涼し天に尽きたる神の道  
 奈良古賀しぐれ  
 磐座を天に戴き里涼し  
 同  
 俳諧の夜はほうたるに逢ひにゆく  
 同  
 皐月富士仰ぎ日本を見上げたる  
 神戸涌羅由美  
 薫風や揺れるものみな風のもの  
 同  
 金魚玉ひとりぼつちのお留守番  
 同

河骨や池の勢ひの立ち上る  
 東京岩村恵子  
 夏潮や白より白く砕け散り  
 同  
 ときめきを忘れて久し業平忌  
 同  
 落花踏むよりみ吉野の旅となる  
 相模原木村享史  
 散ることを忘れ眠りに入る花  
 同  
 ひとひらを零して花の目覚めしか  
 同  
 生涯のよき日かさねて明易し  
 長岡安原 葉  
 みな齢かさねしことも露涼し  
 同  
 明易や未来へ花鳥諷詠詩  
 同  
 母の日や良きことのみを母に告げ  
 龍ヶ崎今橋真理子  
 母の日を祝ふに個性姉妹  
 同  
 菖蒲の日明るいうちに風呂たてて  
 同  
 青空へ色の階段ジギタリス  
 東京橋本くに彦  
 夏蝶の園をよぎりし黒の綺羅  
 同  
 羅を着て絶妙の裾さばき  
 同  
 睡蓮のそよぐことなき葉を広げ  
 袋井湖東紀子  
 睡蓮の間にくありし水の闇  
 同  
 子を抱けば未来の重き端午の日  
 同  
 若葉して富士の日本となりにけり  
 福山竹下陶子  
 ぼうたんの咲き初めの香は神なりし  
 同  
 既にして万朶の花の日本に  
 同  
 わが息のとどくところに初桜  
 熊本岩岡中正  
 桜東風ことば放てば光りけり  
 同  
 真直に木の芽のこゑの降つてくる  
 同

# 雑詠句評（九月号より）

眞理子・保佳・静龍  
千鶴子・中正・とほ歩  
美奇・憲明・むつみ  
葉・廣太郎

## モルダウを聴いて春愁あやしをり 東京 内藤呈念

モルダウと聞けば誰しも、あの印象的な旋律が思い起こされるのではないだろうか。日本でも馴染み深く、その由来を詳しく知るまでもなく、ゆつたりとした大河の流れが思われ、穏やかな心持になってくる。繰り返されるその旋律と「あやしをり」という言葉が巧みに呼応し、作者の春愁に奏でるモルダウが、読み手の心にも大きく聞こえてくるようである。季題の持つ魅力を音に託して斬新。（眞理子）

御存知の方も多いと思うが、上五の「モルダウ」は、川の名前であるが、この句の場合はスメタナという作曲家の交響詩の題名である。源流の水の一滴から、小川となり、村や町を流れながら大河となる様子を大管弦楽で描写する名曲である。「春愁」をあ

やす様子が曲を通して実感出来る。（廣太郎）

## 虚子へ向く小さな墓の芝桜 多摩 松井秋尚

「虚子へ向く小さな墓」と云えば、私は寿福寺の虚子谷倉の前に斜めに小さく建っている森田愛子の墓のことであろうと思う。小説「虹」の中に登場する愛子の墓である。芝桜の美しく咲く季節で彼女の生涯を象徴するような雰囲気に感動したという佳句である。（保佳）

整然と並ぶ、虚子の菩提寺鎌倉寿福寺の墓所には、一つ小さく斜めを向いている墓石がある。その先には虚子の墓があり、埋葬されているのは森田愛子である。ここまで虚子を慕う彼女の思いは天上界では成就しているだろうか。季題を通して、あの小説も浮かんでくるのではないだろうか。（廣太郎）（以下略）

天地有情

金子選

蟻といふ元気なものを見てゐたる  
 月変りして老鶯の声となる  
 山始斧煌めいてをりにけり  
 斧入るる音冷えびえと山始  
 み吉野の桜月夜にわが遊行  
 物の怪も浮かれ吉野の花月夜  
 二階より隈なく俯瞰椽の花  
 極楽の風の通ひ路若葉蔭  
 滅びゆく湿原と聞く苔の花  
 リラ冷の日の大会と記憶せん  
 願はくは花散る下に別れたし  
 山の端を離れて花の月となる  
 本丸は落花まみれや夜の風雨  
 天地の神も唄へり百千鳥  
 忘るるよ勿忘草を貰ひても  
 睡蓮を見てモネ思ふそれも陳腐  
 六月の日射の白く広々と  
 影白く日傘の白く足早に

神戸 後藤立夫  
 同  
 東京 稲畑廣太郎  
 同  
 相模原 木村享史  
 同  
 塩原 稲岡 長  
 同  
 長岡 安原 葉  
 同  
 龍ヶ崎 今橋真理子  
 同  
 福山 竹下陶子  
 同  
 神戸 後藤比奈夫  
 同  
 東京 今井千鶴子  
 同

ことごとく五月かぐはしみづみづし  
 草木の高く匂ひて五月かな  
 黴生えし人間となりぬたりしか  
 けらけらと笑へる螻蛄は日蔭者  
 三更に覚めて涼しき月明り  
 黎明の星を手中に懸り藤  
 指されたる蜃気楼とはあんなもの  
 あれだけの蝌蚪の消えたる池一つ  
 富士見えしところに咲いて桐の花  
 今年また峠の花と山法師  
 掌をこぼれて春の行きにけり  
 麦秋といふ望郷のやうなもの  
 百歳を超えての選句爽やかに  
 病む妻に更衣とは言ふものの  
 うたかたのものけ談義花の山  
 屋根の音ましらか花のものけか  
 五月闇七盛塚のどれがだれ  
 潮寂びの七盛塚に五月雨るる

同 内藤呈念  
 同  
 群馬 中杉隆世  
 同  
 金沢 藤浦昭代  
 同  
 東京 河野美奇  
 同  
 熱海 嶋田一步  
 同  
 熊本 岩岡中正  
 同  
 仙台 赤川誓城  
 同  
 東京 大久保白村  
 同  
 神戸 三村純也  
 同

# 眩量

稲畑汀子

長い東京滞在になった。木曜日に上京して来て今日で四日目である。先週も北海道ホトトギス大会の旅があつて、芦屋に戻つても殆ど毎日出掛ける予定が入つていた。

「もう若くはないのだからいい加減、スケジュールを見直さなければ倒れますよ」

周りの誰彼が警告して下さるようになった。

「自分で分かっている積もりなのだけど、なかなか予定を減らすことが出来ないのよ。でも考えなければねえ……」

最近寝不足が重なつた所為かふつと眩量がする。穴に落ちて怪我をした左腕も何となく重く感じない。

「あーあー、やっぱり疲れが溜まつて来たのだわ。少し休むようにしなくては本当に倒れてしまいそうだわ」

朝、何時ものようにお風呂に入つて五分間正座をしたら、気分がしゃんとするような気がして、お湯を張つた。

今日は山会である。鞆からワープロ用のフロッピーを出して来て文章を書きはじめようと鞆のポケットを探つた。

「え？無い、まさか」

心臓が高鳴つた。いつも鞆のポケットに入れてある二つのフロッピーが無いのだ。芦屋のワープロで打ち直しがあつて、出したまま鞆に戻すのを忘れてしまったのに違いなかった。

東京に置いてあるフロッピーに合うのがあるかも知れないと、試してみるが、

「このフロッピーは間違つています」

という文章が出て来て、取りつく島がない。

いよいよ諦めて、昔のように原稿用紙に手書きで書いて行かなければならないと覚悟を決めた。

合わないフロッピーを棚に戻そうとしたとき、棚の奥にもう一つフロッピーがあるのに気がついた。殆ど諦めながら差し込んでみると、画面が出てくるではないか。

「ばんざーい。これでワープロで文章が書ける。助かったー」

これからが大変なのであるが、私は何時ものようにワープロに向つて山会の文章を書きはじめたのである。

最近、五人で始めた句会がある。NHK出版から出た『花鳥諷詠、そして未来』という本のご縁の五人で夕食をして句会をしようということになった。昔、少人数で句会をするのが流行つたことがある。成瀬正俊、依田秋菫、京極高忠、そして私で葉書句会

をしたことがある。三人寄れば句会をするというのが流行った。

「初句会浮世話をするよりも 虚子」

いつもこの句を思い出す。

小諸を訪ねた比古さんと年尾と虚子の三人で句会をして、

「山国の蝶を荒しと思はずや 虚子」

の名句も生まれている。

美しい赤い大輪のアネモネの花束を抱いて来られたNHK出版の三人と、皆さんに本を勧めて下さった美奇さんと私の五人で始まったアネモネ句会。眩量がするほど忙しいスケジュールなのにまた句会を作ってしまった。これからどう進んで行くかは分からないが、ふつと楽しみでもある。

東京滞在が長くなった。眩量が気になって、何時も頼むニコニコマッサージに来てもらって凝りをほぐして貰おうとしたが、とうとう時間がとれなかった。

山会が済むとやつと芦屋に帰れるが、また三日後には上京しなければならぬ。

